

# 文化の類型とコミュニケーションギャップ

藤本久司

**要旨：**世界の文化を類型化し対比する主要な研究から「コンテキスト」「時間感覚」「結論の位置」「視線」「対面距離」「身体接触」「あいづち」に視点をおいたものをとりあげる。また、コミュニケーションギャップの具体例をいくつか挙げ、上記研究及び他の複数の視点から考察を行うと、1つの例にも様々な文化背景の要因が関わっていることがわかる。われわれは現代社会の異文化間コミュニケーションにおける非言語の重要性を一層注視しなければならない。ネット社会の発展の中で、文化背景を軽視した言語だけのコミュニケーションが増えることで、不要な誤解や摩擦が増え、時に極端な情報が伝わっている。誤解や無理解はそのままにしておくことと偏見が変わる。理由や文化背景を正しく知り、また、説明する努力が求められる。メッセージの送り手は、送る相手の文化スタイルに合わせないとメッセージの内容が正しく伝わらない、ということを再認識することが必要だ。そのため自文化を深く知り、異文化の相手に正確に説明することと、接触する相手の文化について事前の理解を深めた上でコミュニケーションすることが肝要である。

## はじめに

出身国・地域、出身エスニックの相違によるコミュニケーションの違いについては、その背景にある文化の類型に関し、様々な視点による研究と説明が行われている。ここでは諸研究で紹介されている代表的な文化類型の対比を挙げ、日常的に起こり得るコミュニケーションギャップについて考察する。それによって、文化間の基本的相違点を再認識し、誤解、摩擦、コンフリクトなどの克服、異文化間の理解の一助とする。

言うまでもなく世界の文化はどのような視点からでも一律に二分化し対立軸で比較できるものではない。以下で取り上げる文化の分類はあくまで相対的なものであり、それぞれの文化は比較対象の文化によって位置づけが右にも左にもなる。また、1つの民族、文化をひとくくりにし地域差やグループ差、個人差を無視することは非現実的であり、1つの文化の中でも幅、揺らぎ、変容が常にある。以上のことを前提にして考察を進めたい。

## I. 文化の諸類型

### 1. 「ローコンテキストの文化」と「ハイコンテキストの文化」

コミュニケーションにおいてコンテキスト（文脈）がどの程度重要な役割を果たすかによって文化を区分化したものである。多くの研究者によって検証や探究がされているテーマである。日本語訳し「低文脈文化」「高文脈文化」と呼ぶ場合もある。「コンテキスト」は「コミュニケーションが起こる物理的、社会的、心理的、時間的な環境（その場の雰囲気や状況、言語外の意味、相手とのつながりなど）のすべて」（鍋倉 2009）とされる。

「ローコンテキストの文化」は言語が主要な役割を果たす文化であり、メッセージの大部分

が言語によって伝達される文化、言い換えれば、言語がそのまま正しくメッセージを伝えていると考える文化である。口から出た言葉、書かれた文字がいわゆる伝えたい情報であり、言語表現が発信者のホンネ、真実と限りなく近い。会話の量は比較的多く、言葉と同時に感情もホンネ、本心の通り表現されることが多い。親友や恋人、夫婦は親密感が深まれば深まるほど、何でも話せる仲となっていく。ローコンテクストの文化は、歴史的に異人種、異民族と接触の度合いが高く、文化的に多様性があり、個人主義が発達している地域に多い。共有するコンテクストの割合が少ないということが大きな要素になっている。

「ハイコンテクストの文化」は、文脈に大きく依存する文化、つまり、明確な表現は避けて文脈から互いに相手の意図を汲み取る文化である。言い換えれば、言語がそのまま正しくメッセージを伝えているとは言えない文化である。「察し」「行間を読む」「空気を読む」などの表現が当てはまる。メッセージは、言葉よりもほとんど状況や人にあり、言葉や文字は必ずしもホンネ、真実を伝えていない。会話の量もローコンテクストの文化の人々より少なく、感情の表現もローコンテクストの文化に比べると少ない。時には、配慮、遠慮、心配り、慎み等の理由から、ホンネとは異なる態度を取ることもある。従って、ホンネや真実を汲み取るという作業がコミュニケーションで日常的に行われる。同文化の者同士で親密な関係になる程、それがスムーズに行える関係になり、「話さなくても分かる仲」「ツーカーの仲」「以心伝心」などと表現される。ハイコンテクストの文化は、同一民族で、歴史的に共有する部分が多く、集团的、画一的な文化を持つ地域に多い。

ゲーリー・フォローは著書「異文化マネジメント」で世界の主要な民族を、ローコンテクストに近い順から「ドイツ系スイス人・ドイツ人・スカンジナビア人・アメリカ人・フランス人・イギリス人・イタリア人・スペイン人・ギリシャ人・アラブ人・中国人・日本人」と位置付けた。この中では日本人が最もハイコンテクストの民族とされている。

コンテクストの文化的相違の具体例として、古田他（2002）に次のような話が紹介されている。残業続きの日本人サラリーマンにアメリカ人が「奥さんは何か言いませんか」と質問する。日本人サラリーマンは“*She says nothing*”と答える。アメリカ人は、奥さんが怒って何も言わないと受け取り、答えた日本人は、妻は何も言わず理解してくれていると考え満足している。対象的な文化を象徴する逸話である。

はっきり意見を言う欧米人と、あいまいな表現で真意がわかりにくい日本人の対比は、近年、政治、経済の国際化とともに話題にのぼるようになった。特に国家間交渉や企業間交渉では日本側の弱点として早くから取り上げられてきた。同じハイコンテクストに位置する中国人と日本人でさえ、交渉においては文脈の捉え方で時折行き違いを生んでいる。今日、文化の相互理解が進んだとはいえ、国家レベルから企業、個人のレベルまで、日本側の主張が不明確な表現になるケースはまだ多く、国際的な誤解を生むこともしばしばである。

## 2. 「P タイム型文化」と「M タイム型文化」

時間の捉え方に関して、文化人類学者エドワード・T・ホールが唱えた考え方である。1つの時間に複数のことをするのをPタイム（多元的時間＝ポリクロニックな時間）、1つの時間に1つのことをするのをMタイム（単一的时间＝モノクロニックな時間）と呼び、それぞれどちらを優先するかで文化の型を分けたものである。

Pタイムの文化では、時間はゆったりとつながった1つの流れとして捉えられ、分断するこ

とがない。仕事の中身よりも、その時々を大事にし、人と交流し関係を確立、維持することが中心で、結果的に複数のことが同時に進行する。時間的スケジュールは努力目標であり、縛られることがない。一般に現在の事実や未来の予測でも楽天的であり、計画や約束は比較的柔軟に捉えられる。それらは自他の都合、気分、天候、周りの環境や出来事などによってしばしば変更されることも多く、時の流れるままに複数の物事をこなしていく。具体的な例として、市場や店で1人の店員が複数の客と同時に会話しそれぞれの注文に応じていくといった光景や、イベントやパーティーなどは時間通りに始まらず遅れるのが普通で、面会の時間を決めても約束の時間通りに人々が来ることが少ない、といったことなどが挙げられる。多くのアジアの国、アラブ諸国、ラテンアメリカ、ギリシャ・トルコなど地中海沿岸諸国が該当し、ハイコンテクストの文化圏に重なり合う場合が多い。(古田他 2002、伊佐 2007、久米他 2007)

M タイムの文化では、人々は時間を分断しスケジュールを組み立て、それらを優先して扱う。(古田他 2002)。自ら立てたスケジュールであるにも関わらず、それを時間通り遂行することに縛られ、無駄に使わないように腐心する。そのため、人間関係より仕事の実質、内容、実績に重点が置かれる。具体例としては、仕事の面会のためには事前に時間を正確に決めた予約が必要で、予約のない面会は受け入れてもらえないことが挙げられる。また、M タイム文化圏の繁盛する店では、順番をはっきりさせるため一列に並んだ行列の光景が見られる。発信された言葉を正確に履行することに重点が置かれることから、ドイツ、アメリカなどに代表されるローコンテクストの文化圏に重なり合う場合が多い。

比較文化・文明学者のゲブサーは、自然のリズムに則ってハレとケが周期的にめぐる世界を「神話的世界」、一定に時を刻む時計が生活を支配する世界を「記号的世界」と呼んだ。神話的世界では1日、1年が円を描くように巡り来、日常や人の一生が(死後も含めて)繰り返されるといふ「神話的時間」があり、記号的世界では分断された時間を管理することが求められる「記号的時間」が存在する。P タイム型文化は「神話的時間」と、M タイム型文化は「記号的時間」と密接に関係している(伊佐 2007)。

日本も基本的にP タイムの文化圏であるが、近代化、西欧化によって、特にビジネス面でM タイムのスタイルが定着した。しかしながら、仕事も実生活もM タイム文化に完全移行しているわけではなく、管理された時間を厳守し仕事にも完璧を求めながら、人間関係も等しく大事にするため、予定外の来客、周りの状況変化、急用などにもできるだけ対応しようと努める。会社の会議はM タイム的に時間通りに始まるが、会議の進め方は極めてP タイム的であることが多い。現代の日本人がストレスを貯め、世界で最も「肩がこる」民族と言われる背景は、相容れないM、P 両タイムの生活を送っている人が多いからだ、としばしば説明される。

### 3. 「結論を初めに述べる文化」と「結論を最後に述べる文化」

前方重心型の英語では topic sentence として結論を冒頭に述べ、次にそれを specific details で補強する直線的な論理の展開を好む。後方重心型の日本語では、結論にいたる道筋を外側からプロセスを追って循環的に記述する。このような思考方法の差はその民族が住む風土によって規制される。牧畜型の欧米の民族は合理主義を尊重して論理的になり、稲作型の日本人は忍従や情緒を尊重して非合理的になるという(佐野他 1999)。

英文学者の外山滋比古のように、ヨーロッパの言語はレンガのようなもので、一語一語を規則に沿って並べてがっしりした一文を作り、抽象的な要約文、具体的な例示など、バラ

スを取り文章を作る。一方、日本語はトウフのようなもので、自分の論理より相手の感情に訴えかける方法で、どこから始めても終わってもいいような文章になっている、論理的なつながりより、相手が段落間を汲み取り補完してくれるという前提がある、というのである（古田他 2002）。

それぞれの文章や会話にもその特徴は現われる。発想法の差はコミュニケーションの方法にも反映される。英語が直線的であるのに対し、ロマンス語、ロシア語などは英語に比べ複雑な屈折線を描いて結論にいたる、とされている。

周辺的な事情の説明、つまり話題の外縁から話を進め、最後に結論を述べる（場合によっては途中から論理が変化する可能性がある）日本人の談話スタイルに対し、アメリカ人からは、話を逸らしている、直接質問に答えていない、などと誤解され、批判を受けることになる。

佐野他（1999）では、一例として次のような、アメリカ人面接官の質問と日本人英語教師の返答を紹介している。

American: What is the major discipline problem at your school ?

Japanese : Our school is an old school. It was established about fifty years ago ...

日本人の答えは質問に対する回答となっていない、という意見は文面上事実であり、アメリカ人面接官は質問の英語を間違えて聞きとったと誤解した。しかし、日本人である私たちは、この日本的な答え方から、日本人英語教師がこの後どのように話を展開しようとしたか概ね想像できる。西田（2008）は、応答の直接性と間接性に関し、「問われた内容に直接答えるのが妥当とする文化と、直接の答えを含める回答あるいは答えを考えさせるような回答でもよいとする文化」があり、問題は前者の文化の者（例：アメリカ人）が後者の文化の答え方に「不真面目」などの評価をしてしまうことだ、と述べている。

この例の場合「アメリカ人」は主に白人中流階級の場合であって、非白人系アメリカ人やイギリス人などは比較的意見をストレートに言わないと言われている。イギリス人が自分に関わる話題は注意深く避け、よく天候の話をするのもそれがお互い差し障りのない話題だからであり（佐野他 1999）、この点は日本人同士の会話にも通じるものがある。

#### 4. 会話のときに「視線を合わせる文化」と「視線を合わせない文化」

欧米系の白人に代表されるように、対人コミュニケーションではアイコンタクトを重視し、目が合って初めて話者双方の関係が成立したものとする。アイコンタクトを保つことは、誠実さ、相手との会話への関心を表し、意思、感情を伝え、相手の反応を読み取り、話の開始と終わり、話の交代のタイミングなどを捉える重要な意味を持つ。ある調査によると、アメリカ人3人以上の小集団のコミュニケーションの30～60%の時間が他者の目との接触に用いられているという（古田他 2002）。この文化の中で目をそらすことが多ければ、会話に興味がない、続けたくないという意思表示になる。同じアメリカ人でもアフリカ系は目をそらすことが多く、カリブ系は目上の人の目は見ないようにする。ネイティブアメリカンには目を見ることを攻撃と考える部族もある。なお、アイコンタクトは相手の目を凝視することではなく、凝視は欧米においても失礼な行為となる（佐野他 1999）。アイコンタクトの多いアメリカ人でも、一般的な会話で眼を合わせる一回の時間は数秒であり、長時間続けて相手の目を見つめることは少ない。したがって、視線を合わせるが多いということは、つまり、視線を合わせる回数が多いということになる。

一方、アラブでは欧米以上に、近い距離から相手の目をまっすぐ凝視する。目はその人の全人格を映し出すものと考えられていて、互いを凝視し合うことは互いの魂と触れ合うことであり（古田他 2002）、不用意に目をそらすのは、非友好的な態度、又は軽蔑を示す態度として誤解されてしまう（鍋倉 2009）。

一方、日本では会話時、相手の目を直視せず、目をそらすほうが多い。特に目上の人には目をそらすことが敬意を表すことになる。知らない人と目が合うと、日本人は即座に目をそらす。エレベータに乗り合わせた知らない者同士が視線を避けて天井や足元を見ているのは、典型的な光景である。日本の不良グループやヤクザ社会で「目が合った」というだけで因縁をつけ喧嘩になる、という話があるが、これも、日本独特の視線を合わせない文化が背景になっている。

これに対して、欧米では知らない人同士が廊下やエレベータ内で偶然視線が合った場合、ほぼ笑んだり軽い挨拶を交わしたりすることが多い。歴史上異民族同士が出会うことの多かったヨーロッパにおいては、目が合った瞬間、敵意や悪意のないことを相手に示す必要があったためだと言われている。

## 5. 会話のときに相手と「なるべく距離を取る文化」と「なるべく近づく文化」

近接学の第一人者であるホールは、個人が他者との間に必要とする空間の距離を密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離の4つに分類し、それぞれ具体的な数値を設定したが、同時に、いずれも文化が違うと数値も違ってくることも述べている。したがって、例えば、ある文化の人にとっては友人間の距離である個体距離が、他の文化の人にとって恋人同士の近接距離である場合、強い不快感を催す、ということも起こりうるのである。

更に、ホールは著書の中で、会話などのとき、北アメリカの人々に比べてラテンアメリカの人々が取る相互の間隔はかなり近く、北アメリカ人にとっては性的な感情か、又は敵意を呼び起こすような距離にまで近寄らないと、ラテンアメリカ人は楽な気分で話せない、という例を挙げている。言いかえれば、ラテンアメリカの人々にとって、通常北アメリカの人々が取る会話のときの間隔は、よそよそしく他人行儀なものとして映っている可能性が大きいということである。同じアメリカ人でも、白人はなるべく距離を保とうとするのに対して、ラテンアメリカ出身のヒスパニック系は近づこうとする、という例もよく紹介される。それぞれルーツが同じ民族として自然な態度といえる。

自分の周りの personal space は歴史的に与えられた空間の領域に関係すると推測され、人口過密で均質な家族的国家の日本では、欧米よりも間隔は小さい、とされる（佐野他 1999）。当然ながら、個人差、場面、相手との関係、好感度などによって同じ文化圏、同じ個人でも大きな幅と変化が存在する。

なお、対面のときの間隔が小さい文化圏ほど、双方の匂いに対して抵抗が少ないといわれる。日本人から見ると、中東の人々の対話の際の間隔は非常に小さく、息遣いや体臭を強く感じるほど近すぎて、戸惑うことがある（鍋倉 2009）。アラブ人の個体距離は非常に小さく「嗅覚型文化」の典型としても知られる。アラブ人は友人同士出会うと、暖かい湿った息を掛け合う。この文化のコミュニケーションでは匂いを重視し、匂いをかぎ合うことが人間関係を打ち立てる重要な要素となる（佐野他 1999）。これに対し、匂いに対して不潔、不正のイメージが強い「反嗅覚型文化」の代表はアメリカである。匂いへの抵抗が、適度な距離を必要とする隠れた一因になっていると言われる。

## 6. 「身体接触の多い文化」と「身体接触の少ない文化」

「接触文化」「非接触文化」という表現をする場合もあるが、接触するかしないかではなく、接触が多いか少ないかを比べて見た概念である。コミュニケーションのときの身体接触の度合いは相対的なものであり、比較する文化によって自文化は、多くも少なくもなる。また身体接触の手法も文化によって様々である。

アメリカ人の場合、握手する、肩に手を回す、抱き合う、キスするなど、身体接触がコミュニケーションの重要な要素であり、その接触量は日本人の2倍といわれる。更に詳しい調査では、スペイン系アメリカ人はイギリス系アメリカ人より身体接触の量が多い、という。一般的にイギリス、ドイツなど北ヨーロッパやアジアの人々は身体接触が少なく、イタリア、フランス、スペインなど南ヨーロッパやラテンアメリカ、中東やアフリカの人々は公衆の前でも触れ合うことが多いと言われている（鍋倉 2009）一般に会話のとき近づく文化圏と身体接触の多い文化圏は重なり合う傾向がある。

アラブの男性同士が他人の前でキスをし、手をつないで歩く姿は、他の文化圏の人々の目には異様に映るが、身体接触が最も多い文化の端的な例である。また、20世紀の東西冷戦期にはソ連、東欧のリーダーが男同士、空港で歓迎の濃厚なキスを交わすシーンが見られ、アラブ文化圏の特異な習慣として西欧でも話題になった。

一方、(夫婦や恋人ではない) 親しい異性の頬への軽いキスや抱擁(ハグ)も欧米、ラテンアメリカなどでは日常的な挨拶の中で行われることが多いが、アジアやアラブ圏にはなじみにくい。こうした男女間の身体接触の習慣は、非言語コミュニケーションの中でも民族の宗教観、倫理観などと深く関わっており、将来、異文化間の交流が進んでも、元々身体接触の習慣のなかった他の地域に根付く可能性は少ないであろう。

## 7. 会話であいづちを「打つ文化」と「打たない文化」

日本人は会話のとき同感や共感を示すしとして、あいづちを多く打つ。日本人は世界で最もあいづちを打つ民族だという説が有力である。背景には、間(ま)を重視し、絶妙のタイミングで間合いを測る日本独特の文化がある、といわれる。一方、アメリカ人やドイツ人では、あいづちがほとんど見られない。

他の国から日本に来た人は日本人が話の途中であいづちを頻繁に打つのを初体験し、困惑したり驚いたりして、時には話が止まってしまうこともある。逆に、日本人は話している最中、反応のない相手の態度が不安になり、聞いているのかどうか確認したい衝動に駆られる。対面に比べ電話では特に相手の表情がわからないために、こうした不安は増大する。日本人は電話では、相手が話を聞いていることを互いに確かめるためにあいづちを2、3秒おきに繰り返すという(西田 2008)。しかし、日本人が会話の途中、相手の外国人に、きちんと聞いているかどうか確認したとしても、なぜそのように疑問に思うのか逆に不思議がられる、というのが一般的な反応のようだ。アメリカ、ドイツといった国の人にとって、相手の話の区切りまで黙って聞くことは日常的なことであり、日本人のような頻繁なあいづちは相手の話を妨げる態度に映るのである。付言すれば、会話中視線をそらすことが多い日本人の場合は、あいづちを打つことで相互の話の交代、継続の頃合いを見ており、欧米の場合、先に述べたようにアイコンタクトを主にして、そのタイミングを測っているといえるのではないだろうか。

## II. いくつかのコミュニケーションギャップについての考察

ここでは舞台を日本国内に限定し、在住外国人が日本人との間で意思疎通できるレベルの日本語力を持っているという前提で、いくつかのコミュニケーションギャップの例を取り上げる。そして、前章の主な文化の類型と、前章で記述できなかった類型を考え併せ考察を進める。

### 1. 【具体例 1】文化庁文化部国語課（2007）では、漫画で以下の話が紹介されている。

クラスの中国人留学生（女性）がゴマ団子を多く作ったので、皆に食べてほしいと配ってくれた。受け取った一人の日本人学生（男性）が、ちょうど郷里から送ってきた和菓子があったので、翌日お礼に彼女のところへ持って行った。彼女は驚いたように和菓子を1つ取って、怒ったようにドアを閉めて去った。日本人学生は「何か悪いことをしたのだろうか」と不安になった。

#### 【考察 1】

同漫画では、その様子を見ていた韓国人留学生（女性）が、とまどう彼に、日本人がすぐお返しをすることの不思議さを述べ、「次の何かを期待している、又は、何か下心があるのではないか」と語っている。

久米・長谷川（2007）では、「お返し文化」を日本文化の特徴とし、誕生日プレゼント、結婚式お祝い、葬式、旅行の饞別などにお返しを常に考えて行動する日本人の「お返し文化の刷り込みの罨」を挙げている。アメリカでは何かをあげた人がお返しを期待することはなく、何かを返すとかえって驚くかもしれないし、また、アジアの国で友人同士なのに何かをお返しすると冷たい「縁切り宣言」と誤解される危険性を述べる（久米・長谷川 2007）。ゴン（2008）は、中国人が贈り物をするとき、市場価値としてではなく気持ちを重視し良い人間関係を築くためにするのであり、同じ価値の品物を返礼として贈るのは無礼になる、特に、直後に返すのは関係の終わりを意味する、と説いている。

視点を変えれば、日本人の行動には、借り貸しの感覚と礼儀が結びついた独特の文化があるといえる。つまり、物をもらった、という「借り」を作りながら、何も返さない「義理を欠く」状態をそのままにしておけない、という心情から、贈った側の真意とは関わりなく、暗黙の礼儀の表れとして早めに「お返し」をする。日本文化の中で育った者同士なら、贈った者も恐縮しながら返礼を受け取り、礼儀を心得た人として良い関係が継続し、何も返ってこない場合は結果的に関係が壊れる可能性がある。行動としては正反対の現れ方をする習慣の1つであり、現代社会で多くの日本人が経験する確率も高く、誤解を生むコミュニケーションギャップとして認識を深める必要がある。

### 2. 【具体例 2】小坂（2007）では以下のような例が紹介されている。

外国から日本の地方都市に仕事が決まった E さん（女性）。仕事の初日、上司が関係者に紹介して回ってくれた時、いろいろな人から、「今度は食事をしましょう」「一度家に遊びに来てください」などと誘われ、親切をうれしく思った。しかし、いつまで経っても誰からも誘いの連絡がなかった。その後も何回も同じような挨拶があったが具体的な誘いはなく、E さんは日本人をすっかり信用できなくなり、ホームシックになった。

#### 【考察 2】

E さんが日本人不信に陥る前に、親しい日本人になぜ具体的に誘ってくれないのか聞けば少

しは悩みが減少したかもしれないという（小坂 2007）。無論（本書で紹介されているいくつかの理由のうち）「建前で言っただけ」「忙しくてそれどころではない」という人もいるだろうが、多くは「誘いはしたが、招待するきっかけがない」「どのように接待したらいいかわからない」「こちらから声をかけにくい」などが主な理由ではないかと思われる。招待や接待の文化スタイルに対する不安、異文化への不慣れなどが大きな要因で、日本人としての戸惑いである。また、伝統的共同体意識が希薄になり個人主義の要素が強くなった現在の日本の家庭では、外国人＝ソトの人をウチに受け入れることに一層障壁が高くなっているのかも知れない。また別の見方をすれば、日本人の集団主義の表れとして捉えることもできる。地域で受け入れた外国人に対して自分だけが突出して親しくなること、目立つことへの抵抗感もあり、隠れた要因でもあろう。

更に、おそらく欧米系と思われる E さんが、日本人の言葉に不信を抱いたもう 1 つの原因として、E さんの持つローコンテキストの文化背景があると思われる。言葉に表現された誘いの予告は E さんにとって発話者の真意であり、具体性がある言葉として受け止められた。発した日本人にとっては、それがどの程度実現性があるかどうかより、「招きたい」という「儀礼」的言葉を加えることで、あなたをその位大切に考えていますよ、という気持ちを伝えることに重点が置かれている。ハイコンテキスト文化の微妙な言外のコミュニケーションである。初めて日本に来た欧米出身者には非常に解読の難しい非言語のスタイルといえる。

### 3. 【具体例 3】日本に留学したあるオーストラリア人男性 J さんの疑問（筆者の実例）

「休みの日に寮から外へ出るとき、寮の世話をしに来てくれるおばさんが、よく『今日はどこへお出かけ?』と聞いてきます。誰でもわかるデパート名や遊園地ならいいのですが、時には言いにくい場所や言いたくない場所もあります。わたしはどうしておばさんにいつもプライベートなことを答えなければいけないのでしょうか」

#### 【考察 3】

J さんはローコンテキスト文化を背景に、言語がそのまま話者のホンネを表していると考え、「どこへ」という疑問語に真正面から答えなければいけないと考えている。

一方、質問者であるおばさんは、日本社会のごくありふれた挨拶の 1 つとして上記の言葉を投げかけている。おばさんにとっては、J さんの行き先を詳しく知るのが目的ではなく、J さんとの人間関係の近さの確認のための儀礼的言葉に過ぎない。

では、J さんはどうしたら良いのか。気のきいた日本人の友人なら「ちょっとそこまで」とか「いろいろな所です」とか曖昧な答え方でもよい、とアドバイスするだろう。J さんがそう答えても「そう、じゃ気をつけてね」と、おばさんの会話は支障なく続くはずである。

### 4. 【具体例 4】同じ職場の同僚を家に招きたいブラジル人女性 A さんの疑問（筆者の実例）

「会社で親しい日本人の女性に『引っ越しが終わったので、今度の休みに遊びに来ませんか』と誘ったら『ありがとう。ぜひ一度行きたいです』と言ってくれました。次の休みの日にお菓子などを用意して待っていましたが、彼女は来ませんでした。あくる日それを言ったら、びっくりした顔で、『ごめん、待っててくれてるなんて思わなかった』と言いました。どうして来る気がないのにあんなことを言ったのでしょうか?」



**【考察4】**

日本語独特の儀礼的表現としての視点で、具体例2及び3と同じ要素を持つ例である。日本人が「ぜひ行きます」「また行きます」というあいまいな表現で誘いに応えることは、一面で「あなたの厚意をうれしく思っているので、ぜひ気持ちに伝えたい」という意味であり、一面で「しかしながら、実際行くときは（お互いの都合もあるので）改めて日時を相談しましょう」という暗黙の慣習的意味を付随させている。したがって、日本人が実際に他人の家を訪問するときは、改めて詳しく日時の確認をして、手土産なども買って準備する。一方、言語をそのまま正しいメッセージと受け取る文化の人や、時刻を含め大雑把な約束で事足りる文化の人に対しては、こうした曖昧な儀礼的表現は大きな誤解を与えてしまうことがあるということである。

**5. 【具体例5】 日本人家族と親しくしているペルー人Fさんの疑問（筆者の実例）**

「2週間ぶりに日本人の友達と会った時、最初に『この前はお土産をありがとう』と言われました。どうして日本人は以前もらったプレゼントのことでお礼を言うのでしょうか？ 渡した時にも十分お礼を言ってくれたのに」

**【考察5】**

鍋倉（2009）は、日本文化が過去を重視し、「恩」「義理」「縁」という言葉に表されるように過去にこだわりを持つが、過去にこだわらない文化では過去のことに対して感謝の言葉を述べることもない、日本人の心には強い相互依存の気持ちが存在しているが、独立性や個人主義の社会では儀礼的な言葉は必要ない、と述べている。

Fさんだけでなく、日本人以外の様々な国の人にこの話をすると、感謝の言葉はお世話になった時に心をこめて一度言えば十分で、何度も言うとおかしい、次に会った時に再び言うのは更に意味がわからない、という答えが返ってくる。思い当たるのが、日本国内のハローワークで働く日系人通訳の話である。仕事を探している南米出身者が、数日前親身に相談に乗ってくれた担当者に相談する時、当然ながら最初に「先日はお世話になりました」とは言わない。そこで、通訳の方で気をきかせて日本語訳の最初にその言葉を入れることが多い、という。日本人担当者にとっては、先日の骨折りに対する特段の言葉もなく相談を始められると、何となく気分がすっきりしない（時には不快に感じる）、ということも日本人である我々には理解できる。ただ、他文化出身者にとって、過去の出来事への儀礼的な言葉は容易に理解しがたいものであるということも事実である。

**6. 【具体例6】 インド人留学生が、アメリカ人留学生の態度で感じた疑問（筆者の実例）**

「同じ寮のアメリカ人留学生は寮の担当の教授と日本語で話すとき、言葉は丁寧ですが、対等のような態度で接し、教授と意見が違っても自分の考えを強く主張しています。我々と教授とはかなり年齢差があるのですから、態度は控えめに、年上の人の意見はもっと謙虚に聞くべきだと思います」

**【考察6】**

対話のとき、年齢差を重視するアジアの人々と、対等を重視する欧米の人々の意識の差といえる。欧米、特にアメリカ人は映画等に見られるように、高齢者は若者の意見を対等に聞き、大人は子どもの意見にも耳を傾ける。子どもが親しい大人（親の友人など）をファーストネームで呼び、自分の意見をはっきり主張するのも日常的なことである。一方、アラブやアフリカ、

アジアの多くの文化圏のように、伝統的に年長者に畏敬の念を持って接する社会に育った若者にとって、アメリカ人のこのような平等感覚には強い抵抗感がある。

公に頼らず子どももお年寄りもコミュニティの貴重な労力、戦力として各自ができることを担いフロンティアを切り開いてきたアメリカの文化と、長い歴史の中で年齢・経験を尊重し伝統と秩序を保ってきた文化では、異なったスタイルがあってやむを得ないのかも知れない。

### Ⅲ. 異文化間における非言語要素とギャップ体験

異文化間接触が爆発的に拡大する現在、われわれは異文化間における非言語コミュニケーションのもつ重要性をもっと注視し共有しなければならない。最近の国家間、民族間の紛争、対立を伝えるニュースを見ると、明らかに文化的価値観の相違や伝統的習慣への誤解又は無理解と思われることから起きているものも多い。インターネットの普及により、その国本来の社会風土や国民性と関係なく、その国の中の極端な意見と思われるものが他国でキャッチされ誇大に宣伝され、無用な反発を招くケースもある。こうしたことは、言葉や文字で伝わる言語を主にして情報を理解し、コミュニケーションで、言語以上に重要な伝達役割を果たすはずの非言語要素を著しく欠いた結果といえる。また、それらが近年、頻繁に発生するように感じるのは、とりもなおさずそれだけ異文化間接触が急激に拡大しているという証左でもあろう。

かつて「住む場所や生まれた国は違っても、同じ人間同士、つきあえばわかりあえる」ということが疑問なく受け入れられる時代があった。「わかりあえる」ことも多いが、「わかりあう」程に付き合いが深くなれば、意識するかどうか別にして、実際には「わからない」部分も生まれる。その背景には、生まれ育った文化による非言語のコミュニケーションギャップが存在することが多い。人間はサルではない、という意味では「同じ人間」に違いないが、例えば思考法や行動パターンが同じとはいえないし、歴史知識や伝統への理解、生死観、宗教観などは国、民族が違えば、ほぼ間違いなく異なる。違って当然ということの方が多い土台の上で、われわれは異文化接触を増大させている。したがって、いずれかの言語で話ができ、親しくなり、つきあうほどに理解も深まるが、ギャップも体験する。そして、人それぞれ、組み合わせそれぞれに、多様な異文化間コミュニケーションが生まれ、多様なコミュニケーションギャップが生まれる。新たなギャップを発見し、とまどい、理解しようとするが、反面、誤解や無理解も生まれる。

誤解や無理解はそのままにしておくと、誤解のままに伝わり、また偏見にも変わる。誤解された、理解されない、という局面で、例えば、なぜそういう表現や行動をするのか、理由や文化背景を正確に説明することが、誤解の壁を乗り越え一層深い理解に進む。メディアで大衆的に伝え理解できるようなコミュニケーションギャップは、そう多くない。あるケースを事前に聞いて理解していても、実際に直面すれば同じように驚いたり戸惑ったりすることから始まる。現代の異文化間ギャップは極めて多様であると同時に、有史以来の多数の人々が個別の経験をしているという意味で非常に「個別化」している。その場その場の新しい個々のコミュニケーションギャップ体験に接し、1つ1つ個別に理解への努力をしていく、そしてその体験を様々な媒介によってできるだけ多数に伝えていく、そういう繰り返しが最も肝要である。

異文化の人々と接するとき、「コミュニケーションの送り手は、そのコミュニケーション技能をコミュニケーションしようとしている相手（受け手）の文化に合わせなければならない」（シ

タラム 1997)。自文化の基準で、異文化の人に何かを伝えようとしても的確に伝わらないことが多い。そのため、自文化を改めて深く理解し、相手の文化について知識を深め、事前の相互理解に努力するという行為の延長線上で、コミュニケーションすることが望ましい。そうしたコミュニケーションの努力が、実際に起こるギャップのショックと混乱を極力減少し、問題解決に導く有能な助言者の役割を果たすのである。

## 参考文献

- 伊佐雅子監修 2007『多文化社会と異文化コミュニケーション』改定新版, 三修社
- 久米昭元・長谷部典子 2007『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション—誤解・失敗・すれ違い』有斐閣選書
- 小坂貴志 2007『異文化コミュニケーションの A to Z』研究社
- ゴン, ウエンシャン 2008「中国人は日本人をどう見ているか: 中国人の視点」西田ひろ子編『グローバル社会における異文化間コミュニケーション』風間書房
- 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一 1999『異文化理解のストラテジー』大修館書店
- シタラム, K. S 1997; 御堂岡潔訳『異文化間コミュニケーション』東京創元社
- 鍋倉健悦 2009『異文化間コミュニケーション入門』丸善ライブラリー
- 西田 司 2008「日本人のコミュニケーション行動の特質」西田ひろ子編『グローバル社会における異文化間コミュニケーション』風間書房
- 古田 暁・石井 敏・岡部朗一・平井一弘・久米昭元 2002『異文化コミュニケーションキーワード [新版]』有斐閣
- 文化庁文化部国語課編 2007『漫画異文化手習い帳～日本語で紡ぐコミュニケーション』文化庁
- ホッフア, ベイツ・本名信行・竹下裕子 2009『共生社会の異文化間コミュニケーション』三修社